53

近代中国における宣教師女医の活動について

三崎裕子

十九世紀初頭に始まったプロテスタントの中国での伝導活動において、医療は福音伝導・学校教育と共に布教活動の重要な柱とされてきた。

プロテスタントの各教派による医療活動が着々と進められるなかで、一八七三年、L・コームスが女医として初めて北京に来た。彼女はアメリカ監理会から派遣され、一八七五年に施療院と女性、子供のための病院を開設した。二番目に中国に渡来した女医は、アメリカ美以美会のS・L・トラスクで、福州に派遣され、中国で始めての女性専用病院を設立している。また同年、アメリカ監理会から派遣されたL・メイソンも九江で診療活動に当たった。"History of Chinese Medicine"には一八七〇年代に中国に派遣された女医として、コームス以下、十人の名前をあげている。その後、十年単位の派遣女医の数は、八〇年代が二一人、九〇年代が二二人、一九〇〇年代が一八人、その後は一九三七年までが五人となっている。中国に渡った宣教医の総数は一八八七年までに一五〇人を数えるがそのうちの二七人が女性であった。そしてさらに一九一五年には派遣医師の半数近くが女医であった。このことは医療伝導における女医の重要性を示すと共に、短期間にいかにその活動範囲が広がったかを示している。

その背景には、プロテスタントの医療活動が施療に力を注いでいたことと、医療を受ける中国側の医師に対する要請が投影されていたと思われる。すなわち宣教医たちの施療の目的は男女を問わず多くの人に接することであったが、儒教思想を背景とする社会では女性が男医を受け入れるのは容易なことではなかった。社会全体との関わりを持たざるを得ない施療においては、当然のことながら女医の存在がクローズアップされたことと思われる。

宣教師女医の活動は、三つの段階に分けられる。第一が施療と女性専用の病院の設立、第二が中国女子医学教育の

開始、第三が五・四期以降の高等教育機関の男女共学化にともなう、共学校での教授、医学書の翻訳、学会活動などである。

宣教師女医の登場と活動は、プロテスタント教派の布教拡大に欠くことの出来ない要素であったと共に、中国人女医を輩出する契機ともなった。さらに女性の医師が誕生して間もない時期の宣教師女医の中国などにおける活動は、女医の地位の確立とも深く関わっていたと思われる。

（埼玉県所沢市）

54 陸軍看病人の教育について

黒澤嘉幸

前回、陸軍看病人は傭人ではなく下士、卒であることを報告したが、その技術教育については殆ど知られていない。

陸軍看病人及び看病卒（以下看病人等という）の技術教育の展開は時期的に区分して次の三段階があったと考えられる。

第一段階　組織整備に基づく基本技術の要求（明治六年）

明治の初め、新政府によって建設を進められた陸軍の最大の特徴は徴兵制の採用であった。徴兵制は明治二年、時の兵部大輔大村益次郎が献策したもので、明治四年の廃藩置県をきっかけに実現したものである。徴兵は明治六年、まず東京鎮台が三千二百七拾二名を徴集し、明治七年から